川村学園女子大学研究紀要　第17巻　第2号　169頁―181頁　2006年

「生と死」：再生儀礼
――布橋灌頂会――

野　村　文　子*

"Life and Death": Ritual of Regeneration Nunohashikanjoe

Fumiko NOMURA

要　旨

布橋灌頂会（ぬのはしかんじょうえ）とは，江戸時代の民俗行事であり，宗教儀礼である。女性は明治5年まで「女人禁制」のために立山に登拝できず，それゆえに，立て前としては極楽往生できなかった。実際には，それの代替えとも言うべき儀礼が女性救済のために用意されており，それが，布橋灌頂会であった。本稿では，立山博物館を中心とした研究・調査に基づいて再現された，この宗教儀礼2回（1996年・2005年）に参加した体験をもとに，この儀礼の意義を考察する。富山県国民文化祭立山フェスティバルの中心的イベントとして再現された第1回の時点では，白い死装束を着て女人衆を演じ，その後9年ぶりに再現された第2回の時点では，観客として参加した。伝統文化の継承，及び，女性学（女人救済・女人禁制）の視点に加え，2005年の調査では新たに「生と死」，すなわち，再生儀礼の要素を重要視する。目隠しをして布橋を渡り，血脈（けちみゃく）をいただき，いったん死んで，生き返る。これは現代人にも魅力ある一種の癒し儀礼とも考えられる。

キーワード：布橋灌頂会，再生儀礼，女人禁制（と救済），極楽往生

問題提起

立山を研究対象にして今年で10年目になる。きっかけとなったのは以下の地方新聞の記事である。[1)]

江戸時代の女性の立山信仰：布橋灌頂会，現代に再現

*教授：比較宗教学・アメリカ宗教史

立山町と県立山博物館は，九月二十九日開かれる第十一回国民文化祭立山フェスティバルで，同町芦峅寺の閻魔堂，布橋，遥望館，姥堂基壇を舞台にした江戸時代の民俗行事・布橋灌頂会（ぬのはしかんじょうえ）を復元する。・・・布橋灌頂会は立山登山が許されなかった当時の女性が，極楽往生を願うため，毎年，秋の彼岸の中日に芦峅寺（あしくらじ）の中宮寺閻魔堂に集まった宗教儀式。目隠しをして布橋を渡り，姥堂（おんばどう）で修行して血脈（けちみゃく）の印をもらう。修行の終わりに暗闇の修行場の窓が開けられ，立山の姿を拝み，極楽行きを願う。年老いて亡くなり，火葬にされる前に血脈の印をお棺に入れてもらうことで極楽へ行けるという。フェスティバルでは，閻魔堂で修験者役が法螺貝を吹き鳴らし，この合図で布橋灌頂を開始。白装束の作家の辺見じゅんさんら女衆（女人衆とも言う）十五人が引導師に先導されて，明念坂（みょうねんざか）から白布が敷いてある布橋まで歩く。・・・

この記事を読んで抱いた疑問を箇条書きに整理すると以下の通りである。

①この儀式は，どのように執り行われていたのか。詳しい記録は残っているのだろうか。

②女人衆が白装束を身に着けるのは，何故か。

③一体，誰が，儀礼を執り仕切ったのだろう。「引導師に先導されて」とあるが，引導師は，やはり，男性だったのか。

④女性たちの強い要望があったに違いないが，他に，もっと大きな目的があったのではないか。

⑤江戸時代のことだから，すべての女性が気軽に参加できたとは考えにくい。参加の条件は何だったのか。布施という形で，きっと「お金」を差し出したことだろう。どれくらい必要だったのか。

⑥女性たちは，誰から，この宗教儀式の存在を聞いたのか。

⑦立山以外にも，これに似た儀式は存在したのか。あれば，どこに，どのような形で存在したのか。

⑧当時，女性たちにとって，姥堂は，いかなる意味を持っていたか。信仰対象は，何だったのか。

⑨この儀式に参加して，女性たちは，どんな気持ちになったか。以後の人生に変化はあったのか。本気で信じていたのだろうか。

⑩国民文化祭に江戸時代の儀式を再現する企画者の意図はどこにあるのだろうか。

以上の疑問に答える形で研究を始めた。さらに，文芸評論家の佐伯彰一の文章も研究を進める大きな要因となった。[2] 氏の祖先は，江戸時代には，毎年，冬になると「曼荼羅」を背負って

江戸と武蔵の国に出かけたそうだ。宿坊の一つである「吉祥坊」は氏の実家である。

布橋灌頂会の現代的再現についての新聞記事と佐伯彰一の文章と，その他，いろいろの条件が重なって，筆者は10年前，今まで忘れていた故郷を見つめ直す仕事に取りかかった。

第一章　女人救済と女人禁制―1996年―

第一節　代替え儀礼の必要性

上述の疑問に答えながら，この儀礼の意味を考察する。

① の説明。完全な記録ではないが，地道な研究がある。「信者の女性たちは白衣の死装束でまず閻魔堂で閻魔大王から裁きを受けて，目隠しをされ，僧に案内されて，昼もうっそうと杉の巨木の茂り立つ明念を踏み下る。坂の下に深く切れ落ちた姥ケ谷（姥堂川）には，朱塗りの布橋が架かっている。・・・やがて，正面の扉が開かれ暗黒から光明世界に転じた時，籠もりの信女たちは恍惚として宗教的感激を味わったという。しかも，真正面に，立山・大日・浄土の聖なる峰々が拝され，感悦はひとしおだったという。」[3] 姥という文字は，田を3ケ書いたとも，母を3ケ書いたとも言われていることも判明した。

② の説明。前述の廣瀬の指摘によれば「死装束」であるから，白いのは納得できる。では，いったん，死ぬのだろうか。「特に中宮寺では，堂・地蔵堂・閻魔堂の芦峅寺を設け，堂では女人禁制の立山における女人救済の法儀を，毎年秋彼岸の中日に布橋灌頂会として厳修された。これは，羽黒山伏の峰中参籠修行，三河花祭の白山行事と共に，全国に数少ない擬死再生儀礼ともいわれる」の指摘がある。[4] さらに，「世俗のちりに染まった者がいったん死んだ後に再び，新しい人間として出発するという考え方に基づいている」[5] との定義によって，この儀礼には白い装束は不可欠だろう。

③④ の説明。儀礼の背後にお金がからんでくるのは当然であろう。「布橋大灌頂は立山芦峅寺修験の最大の行事であり，またそのためにこの大灌頂に入行することを勧めたり，布橋の布を寄進させる勧進活動が，立山芦峅寺の主たる財源だったことは，立山芦峅寺一山文書の随所にうかがわれる。またこの行事で布橋に敷かれた晒布は，死者の経帷子や手甲脚絆，頭陀袋や額布（三角紙冠）などにつくられて信者に売られた。これを裁断して縫うために，一山の坊の女人は忙殺されたというし，これを持って山伏は檀那廻りをし，『立山曼荼羅』を絵解きして，地獄救済の功徳を語った」[6]

という記述から推測すると，儀式執行の本部は芦峅寺であり，勧進活動[7] という社会的・経済的活動を伴っていた。明示されてはいないが，執りしきったのは，男性たちであったと考え

られる。

⑤ の説明。江戸時代のことだから，人びと，特に女性の旅には厳格な規制があったはずである。「佐伯幸長氏が『立山信仰の源流と変遷』に載せた伝承によれば，布橋灌頂会に入行する冥加料は一番入り二人が各々七十五両，二番入り二人が各々五十両，三番入りが各々三十五両という高額だったので，豪家豪農の妻女や江戸，京阪の白拍子遊女も入行したというが，信心のない邪心あるものはこの橋を渡れなかった」[8] 一方，別の本には，「三千人の行列がつづく」[9] とあるが，この場合の冥加料は不明である。三千人の動員は，メディアの発達していない時代には困難をともなっただろう。三千人というのは，単なる概数で，「多い」という意味かもしれない。

⑥ の説明。今までの資料から，芦峅寺の衆徒が廻って伝えていたことがわかる。

⑦ の説明。この儀礼が立山特有のものかどうかは重要な論点である。「芦峅寺ではこれを女人成仏唯一の霊場として宣伝に努めた」[10] という記述がある一方で，「私は立山の固有行事のように言われる《布橋灌頂会》と，三河花祭にともなう《白山行事》なるものが，白山修験行事の伝播したものであろうという，可成り大胆な仮説を述べたい」[11] という反論もあるが，どちらも推測の域を出ない。

⑧ の説明。前述の廣瀬は芦峅版『立山略縁起』を論拠として，「「オンバサマ」と呼ばれる姥尊が信仰対象であるが，「地獄三途の川の脱衣婆の如き醜悪な老婆の姿であるが，・・・しかし，姥尊は，決して脱衣婆のような卑賤は邪神ではない」ことを説明している。[12]

⑨ の説明。本気で信じていたかどうかは論証できないが，旅に出ることが困難であった時代に「信仰」が大義名分として使われていたことを考えてみれば，「娯楽」の要素もあったかもしれない。死後の往生に加えて，儀礼「後」に生き直す，つまり，「現世利益」的効果も十分に予想される。

⑩ の説明。米原寛によれば，「江戸時代の儀式を単に再現するものではなく，現代人にいかにアッピールするか，つまり，江戸時代の人びとの精神世界に思いを馳せ，当時の人びとが災い，乱れた心，病，死をどのように克服していたかを知ることによって，現代の【生・老・死】のテーマを考え直すこと」が，国民文化祭に儀礼を再現する狙いだそうである。[13]

第二節　救済の「解釈」

このように考えてくると，「女人禁制」のもとで「女人救済」の手段，つまり，代替え儀礼が，きわめて周到に準備されていたことになる。荒俣宏が雪深い霊山立山を徘徊して書いた紀

行文の中で「立山のような山岳信仰のメッカに，女人往生を完遂させるようなシステムが絶えて考案されなかったとしたら，これは驚くべき怠慢といわざるをえなかったところである」[14]と述べているが，この指摘には説得力がある。女性の側の積極的関与を想像することは可能であろう。氏は引き続き，「入山禁止，女人結界と，あらゆる機会に往生の可能性を奪われてつづけてきた女性たちは，立山という最高の霊場を前にして，すごすごと引き返したのだろうか。いや，そんなはずがない」[15]と推論し，さらに，男性ならではの理論を展開する。それは，女性のために男性が考案した「遊園地」という発想である。つまり，「女にとって，山岳信仰の女人結界は，逆説的な遊園地であり得たのではないか。立山曼荼羅と地獄絵は，男たちが体力の徹底的消耗というかたちでのみ実体験する試練を，楽しい戦慄として追体験させることをめざした，女たちへのもてなしではなかったか，と」[16]荒俣の考えに従えば，女性は「やさしい」男性たちに心から感謝する必要があるだろう。

富山県が，県をあげて取り組んだ国民文化祭は終わった。その目玉とも言える130年ぶりに再現された女性救済の儀礼については，その後も学会[17]，記念出版[18]，ビデオ記録[19]などのかたちで企画は継続された。筆者は翌年2月22日，「今を生きる」シンポジウム[20]に出席した。いわゆる反省会である。そのなかで，女人衆として参加した女性が手をあげて，「体力のない女性のために，禁制という形をとりつつ救済の道を開いて下さったと思う。感謝の気持ちでいっぱいです」と発言した。これは，荒俣宏の「もてなし」理論（遊園地）に対応する。男性は体力の消耗なしに往生できる「もてなし」を女性たちに準備し，女性たちは，それを「感謝する」というパターンである。筆者は「なんとなくおかしい」と思いつつ，頭のなかは混乱していた。その時，隣に座って話を聞いていた姉（趣味は登山。スイスの山に登った経験を持つ）が，「でも，やはり，登りたい。体力もあるし・・・」とつぶやいた。

そういうことである。すべての女性に体力がないわけではないということである。もてなしは，頂上に登る体力のある女性をターゲットにはしていないだけでなく，そういう女性の登拝を禁止していることになる。女性登山家の草分けで女性として初めて槍・穂縦走に成功した村井米子（1901 — 1986）は，「大正八年夏，はじめて立山へのぼったときは，女人禁制の気分が，山麓にも，山上にも強かった。その前に，富士山と木曽御嶽山にのぼって高山の魅力につかれた少女は，思いもかけぬ反抗に逢って，驚いた。夢にも考えなかった。前世紀の遺物にあらがった。人生の，どの道をいっても，先駆者のぶちあたる，壁である」[21]と記している。すでに，法律上，女人禁制は解かれているものの，人びとの心は昔のままだ。村井はさらに「岩峅寺，芦峅寺を経て，神通川の藤橋のふち，杉田屋泊だったが，その途すがら，《それ女が登るで，山が荒れるぞ》立ち話の声が聞こえてくる。ふと気がついてみると，どの村落でもそう言って

いる。奥へ入るにつれ，その声が喧しい。終わりには，聞こえぬふりをして，脚を早めた。・・・室堂へ着いた夜は，激しい夕立が来て，地獄谷の硫黄の煙が，臭いほどに流れこんだ。《それ，女が登ったで，荒れたぞ》」[22] と記す。悪天候を女性のせいにするなど，不条理である。

このような少数派の女性先駆者の声は，どうなるのか。新聞記事がきっかけで始めた研究が，予想を越えて大きいテーマとしてまとまりつつあった。[23]

第二章　女性学と宗教学の接点

第一節　女人救済・禁制から擬死再生へ

9年が経過した。布橋灌頂会はもう再現されないと思っていたが，「また，やるらしい」という情報が入った。富山の知人がラジオ放送で聞いたという。やはり，女人衆などをエキストラで募集するのだろうか。前回はちょうど女性学を勉強していたときだったので焦点を「女性」において考察したが，今度は視点を変えてみることにした。第二節で述べるが，歴史のなかから女性のみを取り出すのではなく，宗教学との関わりで総合的に考察するという試みである。

前回と同様，地方新聞は重要な資料である。[24]

> 立山登拝を許されなかった女性たちが極楽往生を願い，白装束で立山町芦峅寺の橋を渡る立山信仰の宗教儀礼「布橋灌頂会」が九月，平成八年の国民文化祭以来九年ぶりに復活する。・・・布橋灌頂会は江戸時代，秋の彼岸の中日に行われた。白装束で目隠しをした女性が念仏を唱えながら「おんば谷」に架かる布橋を渡る。橋は迷いの「此岸」と悟りの「彼岸」をつなぎ，対岸のおんば堂に参拝すると来世での浄土が約束されたという。・・・九月十七日から始まり，参加者は当時の宿泊所「宿坊」に見立てた施設で泊まり，十八日に閻魔堂儀礼を経て布橋を渡り，うば堂儀礼，曼荼羅音楽会に臨む。当時の衣装を再現し，雅楽の流れる中，引導衆の先導や声明による引き渡しなど，貴重な体験が味わえる。・・・実行委は参加する女性を募集している。定員は八十人。健康であることが条件で，参加費は二泊六食付き六万円。

前回は当日の儀礼のみ参加のエキストラ（無料）であったが，今回は二泊三日の参加が求められている。[25] 筆者は，今回，単なる観客として参加することにした。

第二節　ディズニー映画とアメリカンドリーム

一見，飛躍するようだが，ここで，主題を《シンデレラ》に移したいと思う。シンデレラと聞いてすぐに連想するのは，「継母や義理の姉たちにいじめられる可哀想な少女」，「粗末な服

を着て，かまどの近くに灰をかぶって家中の細々した仕事をしている」，「その不幸にもめげず，動物や小鳥と明るく暮らしている」，「魔法使いに美しいドレスとガラスの靴をもらって，こっそり宮殿へでかけてパーティーに参加する」，「魔法が解ける12時に，急いで帰る途中，ガラスの靴が抜け落ちる」，「その靴があとでピッタリ合って，王子さまと結婚する」というようなストーリーである。《シンデレラ・コンプレックス》[26] という言葉が流行語になったほど，シンデレラは多くの女性の心の深層に住み着いていると考えられる。

このように「お姫さまになりたい」という女性心理を巧妙につかんで東京ディズニーランドがビジネスに取り入れ，成功している。「シンデレラブレーション」なるイベントがセッテイングされ，戴冠式を再現する。おしゃれしたい，誰かに愛されたい，という本能的部分を突けば女性が魅了されるのも，うなずける。これに対し教育の現場で疑問を投げかけるのもまた，当然である。[27] 美人コンテストに入賞して一夜にして有名になり，映画のヒロインに抜擢された少女を「シンデレラガール」と言う。このような人生に憧れ，「いつか自分もシンデレラ」と夢を見続ける少女たちは今も多い。「待っているだけの受け身型の女性」，「スタイルがよく美貌の持ち主で，ファッションも素晴らしい女性」ではいけないと批判されて，一時はうなずき，頭では理解しても，「それでも」と思う学生に筆者は別の視点（民話研究）からのシンデレラ考察を奨めてみた。

まず，手堅い事典で引いてみる。[28]「世界で最も有名な民話の一つに出てくる女主人公。彼女は，妖精であるゴッドマザーによって単調な骨折り仕事から解放され，最後にはハンサムな王子と結婚する。この物語は（9世紀の中国に遡る）ヨーロッパだけでも500のヴァージョンが存在する。チャールズ・ペローとグリム兄弟が集めたコレクションに含まれている。（野村訳）」 シンデレラとは，幼い頃から絵本やディズニー映画を通して知っているひとつのパターンだけではなく，世界中にヴァリエーションがあり，ヨーロッパだけでも500あることがわかる。ヨーロッパからの移民で建国したアメリカ合衆国には，祖父母より父母，父母より子供が，少しでも裕福になりたい，機会をとらえて出世したいという上昇志向が根強く，この「アメリカンドリーム」とシンデレラが結びついてできたひとつのパターンしか，我々は知らないことを学生に指摘する。しかし，民話研究のなかで類型化される[29] シンデレラは，別の顔を持っている。

一青　窈（ひとと　よう）[30] が歌っている「もらい泣き」の歌詞に「PM　12:00過ぎて，鳴らすメロディー　迎えが来ないシンデレラ」というのがある。ここで重要なのは，12：00，つまり，真夜中という「時間」であり，この時点で魔法が解けるのである。川端香男里が，「異端的な悪魔崇拝や，魔女・呪術師のサバトとされていた民間信仰が，奥深い神話的構造をも

つ民衆文化を反映しており・・・」[31] と指摘し，「ギンズブルグの『ベナンダンティ』の意義は，サバトの背後に農民たちが恍惚状態で行なっていた豊饒儀礼の存在を発見した点にある。これも〈被迫害者〉の側に立つという視点の結果である。やがて，ギンズブルグはサバトの中の，魔女の夜の飛行，動物への変身という要素が，《はるかに深く遠い文化層から出てきた》[p. 133] ことに気づき，ユーラシア大陸に広がるシャーマニズムとのつながりの探求へと向かう」[32] と評価するように，ギンズブルグによれば[33]，シンデレラもシャーマニズムとの関連で考察することが可能となる。

以上の資料や研究を踏まえて学生に伝えることは，シンデレラに憧れてもいいということだ。どのヴァージョンなのかが問題となるだけである。勉強が進み，それとともに時間も経過していく。学生は幅広く物事を考察していく。心を磨いて（加えて，美人でも構わないわけであり）インヴィジブルマンと結ばれたいと願うことも，それなりによいということであろうか。

第三章　生と死―再生儀礼―2005年

第一節　生と死

シンデレラ研究後，問題を複合的に考える習慣が身に付いた。布橋灌頂会の儀礼を女性の「救済」か「禁制」か，という視点にのみ限定していた9年前と違い，今回は一歩踏み込んで考える必要がある。まず，手始めに，当時の資料を再度チェックしてみる。

> 女人往生の護符や血盆経・血脈を授かって布橋を逆に帰り，霊界から俗界へ新たなる気持ちで渡る。これで，即仏成仏し再びこの世に生まれ変わり，お産は軽く残りの人生を健やかに送れ，死後血の池地獄に堕ちず，浄土往生を遂げるという擬死再生儀礼である。・・・このきらびやかな橋渡りは，芦峅寺衆徒の宣布布教による信者集めの演出（一種の儀礼化）でしかなく，やはり擬死再生の本質的なものは，橋の向こうの暗闇の密室道場（おんば堂）での「密儀礼」にあったとせねばならない。ところが，このクライマックスの密法は「口伝」であるがため不明であるが，恐らく真言の結縁灌頂にそい，「血脈」伝授が一番の根幹であったろう。[34]

9年前は立山に登拝できなかった女性を救済する「代替え儀礼」に注目していたが，今回この文書を読み直すと，それに加えて「再生儀礼」[35] が分かちがたく結びついていることがわかる。「女人往生」と「擬死再生」という二つの要素が同時に存在して，立山独自の儀礼を成立させていることを見逃していた。[36]

民俗行事を代替え行事という視点から考察し，体力のない女性の救済か否かを論じる，これは女性学の領域に含まれる。一方で，女性はいったん死に，また生き返って新しい生を受ける擬死再生という視点から考察すれば，「生」と「死」のダイナミズム，死と再生など，いわゆる「生命倫理」に関わる死生学の領域に踏み込むことになる。9年前に新聞記事を読み，新鮮な気持ちで心に浮かんだ10ケの質問を読み返す。⑩が，「国民文化祭に，江戸時代の儀式を再現する企画者の意図は，どこにあるのか」となっている。その時，すでに聞いていたが，「女性」という視点に心を奪われ，聞き流していた。その時の話を，記録ノートを頼りに思い出してみる。

> この企画は江戸時代の行事を単に再現するものではない。現代人にいかにアッピールするか，つまり，「現代的意味」を持つ「復元」である。しかも，江戸時代の人びとの精神世界に思いを馳せ，当時の人びとが災い，乱れた心，病い，死を，どのように克服していたかを知ることによって，現代の「生・老・死」のテーマを考え直すことを目指す。米原寛氏によれば，これを解く鍵は立山曼荼羅にあるそうだ。「心のなかの曼荼羅」が手がかりとなる。[37]

これを読み返してみると，女性救済という表現が見当たらず，生と死にダイナミズムに重点が置かれている。確かに，白い死装束を着て目隠しをした女性たちが，白い布を敷いた赤い橋を渡る光景は絵になる。写真集に載るほど見事だ。それに魅了されて，女性学を勉強し始めたばかりの筆者が，女性の救済か禁制かに議論の中心を置いた。しかし，国民文化祭は「すべての人を対象」にした祭りであったはずだ。現代人がよりよく生きることを模索することこそ，企画者の真の狙いであったはずだ。アメリカンドリームの視点のみでシンデレラを見るのではなく，民話研究総体としてとらえることを学んだ末に到達した結論であったと言える。[38]

第二節　布橋灌頂会の再評価

9年前，布橋灌頂会の再現を国民文化祭として企画した立山博物館は，決して，町おこしだけを目的としたのではなかった。それに向けて，着実に，儀礼の意義や立山信仰の独自性を広める会を開いた。当時，帰省ごとに参加したが，今回も同様に博物館らしい企画を用意していた。「立山のこころ」講座は，立山の歴史・文化に関するテーマを，先学の研究や立山博物館の調査・研究の成果を踏まえて「立山」と「人」のかかわりをわかりやすく講話するものである。[39]

文化講演会としては，【演題】「あの世への道―霊山立山と布橋灌頂会―」が開催された。6月18日（土）午後2時から90分の講演で，講師は佐野賢治（神奈川大学大学院　歴史民俗資

料学研究科・教授）である。「みなさん，死んだら何処へ行くと思いますか」という質問を最前列の参加者に聞くことから講演は始まった。「わからない」，「地獄」，「極楽」，「考えたこともない」などの答えが返ってきた。もし，聞かれたら「立山へ」と答えるつもりだったが，あいにく，聞かれなかった。[40] こういう場合は，答えは「立山」と相場は決まっているが，参加者は，それほど「狡く」はない。昔は，死んだら何処へ行くのかは，すでに明確にイメージされていたから，人びとは迷わなかったが，現代では，多様な思考が広まり，人びとの心に迷いが生じている。これが問題だ，と佐野氏は述べる。最後に「現代人はあの世という死後の世界をイメージできないでいます。宗教者や哲学者のように割り切れればいいが，なかなかそうはいきません。日本はこんなにも物質的に恵まれている国なのに年間３万人も自殺者が出ています。これはどういうことでしょうか。民俗学は民の幸せを求める学問のはずです。私は民俗学者として，これからも社会の多くの問題を解決していけるように提言していきたいと考えています」と締めくくった。現代的再現の説明として明快であるとともに，実践の学を志している者のみができる発言であると受け止めた。

結　論

講演会や勉強会を経て参加した「布橋灌頂会」は前回とは別の雰囲気をもった「再現」であった。エキストラで無料参加した前回と違い，参加費６万円を支払っての宿泊企画。その資料は観光課から送られてくるという仕組みである。以前よりは宣伝も上手くなり，ラジオ放送だけでなく，インターネットや全国版新聞記事にも載った。

現時点でまとめると以下の２点になる，

第１点は，女人往生と擬死再生とは分かちがたく結びついている要素であり，単独で研究するのではなく，複合的に考察する必要があること。このような儀礼が残っているのは珍しく，立山のみの独自の事例である可能性がある。これは，今後の継続テーマである。

第２点は，男女平等が経済的要素と結びつく危険性である。今回の参加で最も記憶に残ったのは，「観光客の橋渡り体験」という企画が追加されていたことである。つまり，80名の女人衆が橋を渡り終えた後，2,000円を支払って「通行手形」を購入したものが橋渡りを体験できるというものである。ここまで来て，2,000円を惜しむのもどうかと思い，筆者も通行手形を買い求めて渡った。渡り終えたところで，私の前を渡り終えた女子高校生に「記者」らしい人がマイクを向ける。こういう場合，なぜか，私は選ばれず，前後の人になる。2,000円払った後で「神聖な気分になりました」とは答えにくいのではないか。ちなみに，男性も通行手形さえ

あれば渡れた。200人以上は渡ったと考えられる。このことを「遊び心」で参加し，それほど深刻には思わなかったが，帰って学生に話したところ，「宗教改革前の≪免罪符≫のようですね，お金がからむのはまずいでしょう」という答えが返ってきた。企画者には悪気はなかったと思うが，「寄付」とか，「布施」にすればよかったかもしれない。

注

1）『北日本新聞』，1996年5月12日の記事。筆者はこの儀礼のエキストラに応募し，女人衆の1人として参加した。この時の調査報告として，「立山信仰と女人救済―布橋灌頂会の現代的再現を通して―」『川村短期大学研究紀要』第17号，1997．3．pp. 67–79　がある。
2）佐伯彰一，「わが家のマンダラが世界に通ずる」，『立山のこころとカタチ―立山曼陀羅の世界』，富山県立山博物館編集・発行，1991年11月1日，開館記念号，pp. 1–3　そこで，氏は，少年のころは，「家宝」を有難がる気にはなれず，青年期には積極的に切り捨てようとしたこと，アメリカ文学を専攻したが，いろいろと内的な転換があり，現在に到っていると具体的事件をあげて説明している。
3）廣瀬誠・清水巌，『山と信仰・立山』佼成出版社，1995，pp. 66–68
4）高瀬重雄監修，『富山県史・民俗編』，編集・発行富山県，1973年，p. 832
5）宮家準編，『修験道辞典』，東京堂出版，1986年初版，「擬死再生」の項目，p. 77
6）五来重，「布橋大灌頂と白山行事」，高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』（山岳宗教史研究叢書10），名著出版，1977年，p. 156
7）前掲書，『修験道辞典』（p. 71）の「勧進（かんじん）」の項目によると，「勧誘策進の意で，勧化ともいう。本来は衆生に対し仏道に入ることを勧めたり念仏などの作善を勧誘する意であったが，転じて寺堂や仏像の造立修理のための浄財を集める意となった。師檀関係の恒常化した近世修験においては，祈願檀家を廻檀して符を与えたり，各種の祈祷を行なう代わりに布施を求める勧進活動が財源の中心となったといわれる。」
8）前掲書，五来重，p. 159
9）藤田庄市，『民俗仏教の旅』，青弓社，1992年，p. 126
10）前掲書，廣瀬誠・清水巌，p. 66
11）前掲書，五来重，p. 156
12）廣瀬誠，「立山の御姥信仰」，高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』（山岳宗教史研究叢書10），名著出版，1977年，p. 226。なお，オンバサマは，その醜悪さのため，明治の廃仏毀釈のときに棄てられ，姥堂は壊された。かろうじて破壊を免れた姥尊が数体残っている。
13）9月15日のリハーサルに参加したときに聞いた話。米原氏は，当時主幹学芸課長，現在立山博物館館長。
14）荒俣宏，「あの世の遊園地へ―立山地獄めぐりと女人往生」，高橋洋二編『別冊太陽・地獄百景』（日本のこころ62），平凡社，1988年，p. 79
15）前掲書，p. 79
16）前掲書，p. 81
17）日本山岳修験学会　第17回立山大会　10月19日－21日（立山国際ホテル）

18) 岡田順一編，『立山神殿御遷宮』，たてやま山岳出版会，1996．12
文：米原寛，写真：原槙春夫，『神顕つ山　TATEYAMA：A Place of God　』BeeBooks，1997．12
19)『第11回　国民文化祭とやま'96　立山フェスティバル　復元　布橋灌頂会』（平成8年9月29日）上映時間45分
20) 富山県民小劇場［オルビス］にて，児玉清氏，林雅彦氏などを迎えて行われた。筆者は，姉（富山在住）とともに出席した。
21)『日本の名山：立山』「女人禁制の立山」博品社，1997，p. 158
22) 前掲書，p. 159
23)『宗教研究：第六十一回学術大会紀要特集』「立山信仰と女人禁制」，日本宗教学会，2003．3，pp. 99–100
24)『北日本新聞』，2005年6月15日の記事。
25) これに対して，「当日参加のみ」を希望する声があり，その選択も可能となった。
26) コレット・ダウリング，木村治美訳，『シンデレラ・コンプレックス－自立にとまどう女の告白』三笠書房，1982
27) 若桑みどり，『お姫様とジェンダー――アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』筑摩書房，2003
28) "THE COLUMBIA ENCYCLOPEDIA" Fifth Edition, COLUMBIA UNIVERSITY PRESS, BARBARA A. CHERNOW and GEORGE A. VALLASI eds., HOUGHTON MIFFLIN COMPANY, 1993, p. 559
29) Thompson, Stith, "The Types of the Folktale：A Classification and Bibliography", Indiana University Press, 1964, pp. 175–177には，510，510Aに分類されている。
30) 作詞も一青　窈である。2004年度新人賞受賞。
31) 川端香男里，「文化の学の新たな展開―C．ギンズブルグ『闇の歴史―サバトの解読』」，『思想』No. 826，岩波書店，1993・4，p. 62
32) 前掲書，p. 65
33) カルロ・ギンズブルグ，竹山博英訳，『闇の歴史―サバトの解読』，せりか書房，1992，pp. 396–397の［地図4］シンデレラ，魔術的援助者（母，代母，動物）が，骨の収集の後でよみがえる異文が見られる場所，は示唆的である。なお，ギンズブルグについては，中沢新一が，『カイエ・ソバージュ1　人類最古の哲学』講談社，2002，pp. 159–178にまとめている。さらに，同書のなかで言及した（pp. 143–157）は，中沢によって，『モカシン靴のシンデレラ』，マガジンハウス，2005に詳しく語られている。
34) 菊池武「再生儀礼と布橋大灌頂会」『平成8年度　第17回日本山岳修験学会立山大会シンポジウム報告・研究発表要旨集』1996，p. 4
35) 菊池武，「我が国の擬死再生儀礼と立山布橋大灌頂会」『富山県立山博物館調査研究』報告書』（前篇：1994・3）（後篇：1995・3）に詳しく紹介されている。
36) 平成5年度から7年度まで3ケ年にわたって開催された「立山のこころ」シンポジウムの報告書『山を観る―宇宙山のカタチ』1995，p. 53に，「野外のゾーンにある布橋灌頂会の橋，ここで救済の実体験をした。それをやってのけたのは実は女の人たちだったんです。私はこれを大いに復元したいと言っているんですけど，なかなか難しいらしい。やはり，宗教儀式というのは。しかし，そういう歴史が歴然として残っている，それから舞台も残っていると言うのは立山だけなんですね。非常に珍しいと思います」（真鍋俊照氏の発言）と記されている。女性の視点もあるが，「立山だけに残っている」という指摘が重要である。
37) 福江充『立山信仰と立山曼荼羅』岩田書店，1998，『立山曼荼羅：絵解きと信仰の世界』法蔵館，

2005 などに詳しく紹介されている。

38) ETV 特集「立山地獄から現代を読む」（上映時間 45 分）養老孟司，1996・9。布橋灌頂会をテーマにして「生と死」を分析している。

39) 全部で 5 回，テーマとしては，「立山信仰に見る日本人の死生観」であり，小見出しとして，〈古事記から今昔へ〉，〈立山曼荼羅の死生観〉，〈我々の地獄観〉である。筆者は〈古事記から今昔へ〉（米原寛）のみ参加。

40) 『人と自然の情報交流誌：たてはく』第 53 号，2005・7，富山県立山博物館編，p. 5　なお，人は死んだら立山へ行くと筆者は信じている。これは，母が死んだ時，姉と議論のすえたどり着いた結論である。

注：本稿は「川村学園女子大学平成 17 年度教育研究奨励」の成果である。